

環境問題に対する意識。 自分の問題として 捉えることが大切。

田村 CSRは海外の現地法人も含めグループ各社の企業行動のすべてにかかわります。会社の評価は、業績とともにCSRの評価も大切です。日本でも昔から、近江商人の心得に「三方よし＝売り手よし、買い手よし、世間よし」があります。CSR活動はさまざまな角度から議論されます。最近話題の地球環境の問題に関して、皆さんはどう考えておられますか？

高城 私は小さい頃から環境教育を受けてきたのでエコに対する意識は高いと思っています。50年後にどんなふうになっているのか不安を感じています。

中川 確かに小学生の頃から、授業でシロクマが氷の上で泣いている絵本を読むなど、環境教育を受けてきたという自覚

があり、幼い頃からなんとなく環境に対して意識はしてきました。でも昔から何も変わっていないんですよ。

三條 私の田舎は10年以上前から日本で一番ダイオキシン濃度が濃い川といわれています。でも、だからって何が自分の身に降りかかっているのか、何を取り組んだらいいのかわかりませんでした。

金澤 環境問題って枠が大きすぎるから誰もがわからないのではないのでしょうか？自分がしたことに対する影響がどういうものかという、まずは意識を芽生えさせることが必要だと思います。

三條 そうですね。自分の身にどう返ってくるのか、といった視点でとらえられるかどうか。環境問題への取り組みでは、そこが大事になってくるのではないのでしょうか。

田村 NTTグループでは2020年を見据えた環境における長期ビジョンを策定中で、2010年3月に発表する予定となっ

ています。我が社としてもそれに向けた環境対策が必要になってきますね。

“つなぐ”こと、効率化を通して、 環境負荷を低減できる。

田村 事業を通じて社会的課題を解決していくのが、企業のCSR活動としては理想です。環境問題に対してICTソリューション企業である私たちに何ができると思いますか？

佐々木 テレビ会議が普及し、出張を軽減すれば省エネにつながる。こういった本業のサービスを追求することがエコに直結する、という有利な立場に我が社はあると思います。ICTで“つなぐ”ことで社会活動の効率化に貢献することが私たちの役割ではないのでしょうか？

高城 流通の世界ではたとえばコンビニのお弁当などは、期限がくると大量に廃棄処分されていますが、ネットワークでつなぐことでよりお弁当の最適な配分ができれば、今より無駄をなくすことができるかもしれませんね。ICTの最適化を実現する技術はそのままエコにつながるのではないかと思います。

阿南 ICTが普及する一方で、機器の高機能化などにより消費電力が増えるという懸念も言われています。そこに対しては今後、イノベーションによって解決を図っていくことが私たちにとって重要な役割になってきますよね。

杉本 効率化や最適化以外にもネットワークを扱っている我が社だからこそできることは、ほかにもいろいろあると思います。たとえば環境教育においても、ネ

社員 座談会

社会的課題を 私たちがICTで解決します

環境問題をはじめ、社会が抱える課題を解決するために、NTTコミュニケーションズグループにできることは何か？
新入社員9名と副社長の田村とともに、ICTの可能性について語り合いました。

(左から) 阿南隼人、佐々木勇典、高城雅一、平村浩章、中川花織、田村正衛副社長、藤原伸建、三條正純、杉本智、金澤大地



ットワークを使って、学校にいなから、工場における環境対策について社会見学をできるようにするとか。

中川 それこそ「現場とつなぐ」という意味では、これからの子どもたちには、環境問題をグローバルな視点で考えられるようになってもらいたいですね。国を超えてリアルタイムで体験学習ができたり、交流を図っていくようなことも大事ではないでしょうか？

藤原 子どもたちだけでなく環境意識の向上といった点では、我が社のお客さまへの訴求が何かできないかと考えています。たとえば、gooに何名か登録してくれたら木を1本植えて、それによってCO₂がこれだけ削減されましたとか、自分が植えた木が育っていく様子がリアルタイムで見られるとか。なんでもそうですが、楽しい仕掛けを用意することで、環境問題を身近にリアルに感じてもらい、最終的には行動につなげていってもらえることが自然なのではないでしょうか。

体験することでしか わからないことがある。 社会ニーズにICTで 応えていきたい。

田村 ICTはCO₂削減だけでなく、社会が抱えるさまざまな課題にソリューションを提供できる技術です。しかしそうした社会のニーズを的確にとらえるためには、社員の一人ひとりが社会への感度を高めることが必要です。富士山清掃や棚田再生など社員参加型プログラムは、社会貢献活動であると同時に、社外の現場から

学ぶ貴重な機会でもあります。皆さんも新入社員研修で、富士山の清掃活動を体験してもらいましたが、どうでしたか？

中川 私は学生時代によく地域清掃活動に参加していましたが、ゴミを拾うことで、汚すのは簡単だけど元に戻すのは大変だというあたりまえのことを身をもって学んだ気がします。また、富士山の清掃もそうですが、仲間同士で参加することで、連帯感や達成感を感じると同時に、環境への意識も高まったと感じています。

杉本 富士山清掃のような活動に参加して、きれいにしようとか、自然を大切にしようとか、地球を考えようだったり、温暖化を考えようであったり、そういう行動をするということ自体、すばらしいことと感じました。

田村 何事も体験してみるということが大切です。さて、話は変わりますが、日本の食料自給率(カロリーベース)は現在、40%、農業就業人口は4%を割り、今や世界最大の食料純輸入国です。棚田再生プロジェクトに取り組んでいるのも、自給率の向上や日本の農業を活性化したいという思いがあるからです。皆さんは日本の農業や食料問題についてどう思いますか？

金澤 就業者の高年齢化ということもあり日本の農業の未来は深刻です。一方で若い人が農業に関心を持ったり、この経済情勢下で失業されている人が増えている現状もあります。人手不足の農家と、農業をやってみたい人をつなぐ仕組みをつくることで、農業、食料問題に役立つことができるのではと思います。

三條 土地も人的資源もあるので、金澤さんの言っている仕組みをつくることは可能だと思います。雇用のマッチング、

農作業の両面においてICT化を進めることで、よりスマートで効率的な農業が実現できるのではないのでしょうか。それにより就農希望者も増加していくとか。

杉本 新規就農する人は、農業に関する基本的知識も不足しているので、ICTを活用したリアル通信教育のような仕組みをつくって、農業技術のノウハウを伝授することもこれからは必要だと思います。

平村 農業教育という意味では、小・中学校の教育のなかにも入れた方がいいと思います。私は今までの人生のなかで、職業として農業を意識したことは一度もありませんでした。子どものうちに職業の選択肢の一つとして農業もあることをまず認識することが大事だと思います。ICTを活用して、都会の学校と農家をつなぐと、バーチャルで農家の素晴らしさを体験することも可能ではないのでしょうか。

中川 ここ数年、食の安全に対する意識が高くなっていますよね。私も買い物をするとき原産地が気になります。最近QRコードがついていて、携帯電話でくった人の顔や食べ方の情報が見られますが、とても便利ですし安心できます。こうしたきちんとトレーサビリティができるような仕組みをつくることで、食の安全・安心に対するニーズにも応えることができると思います。それがひいては日本の農業の発展にもつながっていくのではないのでしょうか。

田村 CSRのRはResponsibility、ラテン語のrespondere(応える)から来ています。我々の社会が直面する課題に果敢に答えていくのが、CSR活動の原点といえます。社会から信頼される企業人として、ICTで社会に貢献するという意識をもってこれからも仕事に取り組んでいってください。

